

太田 真爾『自由の新大陸に導く切符』

桐蔭学園高等学校 2年

「コロナ禍に生きるあなたは今、自由でしょうか。」

世界は今も尚、新型コロナウイルスと懸命に闘っている。その渦中で政府は、あらゆる要請を国民に講じてきた。それは同時に、本来、国民に保障された数々の“自由”を損なうものでもあった。事実、NHK実施の世論調査では、「新型コロナウイルスの感染拡大の影響で憲法で保障されている国民の自由や権利が損なわれることがあったと思うかどうか」という問いに「思う」および「どちらかと思う」と答えた人は合わせて38%いた。(注1) このデータからも分かるように、コロナ禍では自由を感じにくくなってしまった人が多かったといえよう。

コロナ禍で私はより一層、ソトとウチの境界がより明確化したように感じる。扉を開ければ外界が広がり、そこには社会経済が存在している。自分の意志で扉を開けて遊びや旅行に出かけるなどの外出行為は、いわば〈ソトの自由〉を体感しようとする本能的気概に由来するものではないか。だから多くの人々は外出自粛要請に、本能的気概が極限まで抑えられた“もどかしさ”を痛感したと思う。

そんな中、画期的なものに出会った。それは「リモート」である。コロナ禍で、私はとあるリモート・キャンプに参加した。そのキャンプはとても興味深く、全国の高校生が画面上に集い、さまざまなアクティビティを行っていくのだが、実は、そのキャンプには最大の特徴がある。それはアバターを使って「架空の名前で架空の自分」になりきって参加するというものだ。以前の私は名前や顔を晒しているが故に、自分らしさをうまく表現できず、ところどころ封じ込めていた。まるで社会から全員に配られた額縁に自分を何とか収めようと悪戦苦闘しているようで窮屈だった。その点、ネット上のアバターは新しい自分を投影するもの。このリモート・キャンプを通じて社会の創り出した期待像から“解放”された。「新しい自分」をリモート上で創出し、かつての自分とは一味違った“自分”になることができたのだ。

さらにリモート・キャンプに参加して、「時間的・地理的制約」がなくなったことも挙げられる。対面だったころのイベントは、開催地から近いところに住む参加者がメインだったが、そうなれば結果的

に似た土地勘を持った人が集まることになり、論の方向性が一辺倒になることも多かった。だが、リモート化したことで津々浦々、さらに海外在住の参加者も多く、一つの命題にも地域独自の文化や習慣を踏まえた有意義な意見が交流でき、私自身、グローバルな多角的視点を育むことができた。ネット上を通じていつでもどこでも誰でも簡単に参加でき、あたかも近くにいるような疑似体験を可能にする、そんなリモートの多方面で“新しき自由人”を生んだ功績は大きい。

この世界には大きく三つの概念がある。第一に受験勉強のような答えのあるもの、第二に哲学のような答えのないもの、そして第三に“問いそのものすらもないもの”がある。我々は問いがあることを前提に行動しているが、実は問いすらも看過しながら無自覚に生きている場合が多いのだ。だからこそ主体的に問いを見つけるべきなのである。

コロナ禍でも前向きに強く生きながら、また社会的要請を遵守しながら「自由」を噛みしめることは可能である。今まで気づけなかった自由の新大陸を発見できることは一生の財産になる。まずは、自分自身でたくさん問うてみて、哲学的な問いをつくってみよう。きっと「あなた」の身の回りにも新大陸に導く〈不可視な切符〉が散らばっているに違いない。それは一部の人間にしか見えない切符。それを可視化するための「メガネ」は、それを夢中に、かつ、冷静に探そうと決めたその瞬間から掛かり始めているのである。

【注釈】

(注1) 二〇二一年実施 NHK 世論調査 (最終閲覧日 2022 年 2 月 13 日)

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210503/k10013011481000.html>